
青の祓魔師 陰陽師と魔姫と鬼喰らい

滅却師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の被魔師 陰陽師と魔姫と鬼喰らい

【Nコード】

N8562T

【作者名】

滅却師

【あらすじ】

有力な被魔師たちが青い炎を吹きながら流血し亡くなった、サタニによる大量虐殺事件『青い夜』。この事件によって、大きく運命が変わった者たちがいた。あるものは死んでいった家族のため、ただ真っ直ぐに己の正義を貫くことを決意した。またあるものは『青い夜』によって両の瞳を失いながらも、決して絶望を覚えなかった。そしてまたあるものは悪魔を憎み恨み、全ての悪魔を殺すと誓った。3人の運命が今、うねりを上げて動き出す！！ オリキャラが多数出ると思います。原作の雰囲気はできるだけ崩さないようにしま

すが、苦手な方はリターンしてください。それでも見てくれる方は、
暖かい目で見てください

キャラクター設定 見ても見なくてもよいと思います（前書き）

暖かい目で見てください

キャラクター設定 見ても見なくてもよいと思います

其の一

蘆屋孔明 あしやこうめい 15歳 178cm 65kg 男

稀代の大陰陽師、安倍晴明の好敵手であつたとされる蘆屋道満の血を受け継ぐ、蘆屋一族最後の子供。父親や力ある陰陽師たちは『青い夜』によつてサタンに殺され、母親は夫を亡くしたショックで、孔明を生んですぐにこの世を去つた。親の顔を知らずに育つた孔明は、両親を死に追いやつたサタンを倒し、二度と同じ悲劇を繰り返さないことを心に決め、被魔師になることを決意する。

身体能力は常人よりすこし上程度。見た目は茶の少し混じつた黒髪オールバックに黒の瞳。頬に修業時代に負つた十字の傷がある。目が少し悪いため、普段はコンタクトだがたまに眼鏡をかける。

性格はひたすら真つ直ぐで、人であろうと悪魔であろうと過ちを犯す者には容赦ない。女性が戦いの場にいることに不満を感じ、戦いの際には必ず女性陣の前に立ち、自らを盾にして護るような戦い方をする。

陰陽術に優れ、退魔や縛魔の術は一通り使える。他にも太刀と弓矢を我流で扱う。

其の二

語部鞠咂 かたりへまりあ 15歳 162cm 45kg 女

『青い夜』の影響によつて生まれた時から両の眼が無く、何も見る事ができなくなつてしまつた少女。しかし天性の才能か、両眼を失つた代償か、数多くの悪魔を従えることができる力を得た。歌が

大好きで、たまに即興で作った歌を口ずさむことがある。

性格は名前のごとく、傷ついたものを優しく包むような清らかな心を持ち、決して差別などをしない聖母のごとき性格。ただしかなり一般常識に疎いところがあり、ちよつと天然でもある。

真絹のような真つ白な白髪を腰のあたりまで縛らずに流している。肌も死人のように白く、唇は血のように赤い。両眼はいつも閉じているが、一応義眼が埋め込んである。耳には音の反響でどこに何があるかが把握できる術がかけてあるため、目が見えなくとも生活は可能である。

透き通り、全てを癒すような美声は人のみを癒すだけでなく、悪魔を魅了し、集める力を持つ。ちなみに現在の保護者はメフィストとなっている。

其の三

雀部恭哉 すめいけいこうや 15歳 190cm 70kg 男

『青い夜』によって全てを失い、ただ悪魔を殺すことのみ执着した少年。復讐と怒りの感情に狂い、悪魔と名のつくものなら容赦なく殺す、完全なる復讐者。

しかし普段は行動は粗暴で言動は荒々しいものの、他人を気遣い思いやる優しさを持っている。戦闘時と非戦闘時のギャップがかなりある。

ボサボサトゲトゲの茶の長髪に三白眼で大男。顔がよく怖いと言われるが「生まれつきだ」と答えている。

身体能力は常人を軽く超え、戦闘の際は完全な近距離戦闘。ナイフ捌きが特技で、武器は大ぶりのナイフと小ぶりのナイフを二本ずつとハンドガンを一丁。

ブログ 少年陰陽師（前書き）

現在どういうカップリングにしようか迷っていますので、御希望な
どがありましたら感想等に書いてください。返事はおそらくできな
いと思いますが。

ついでに夏の暑さのせいで半分グロッキー状態です。文章におかし
なところがあっても責めないでください。

プロローグ 少年陰陽師

「ここが、正十字学園か……」

てかでかすぎだろ、と一人正十字学園の前に立ち止まりつぶやく少年。其の少年を、道行く人々は物珍しそうな目で見ていた。

茶色がすこし混じった黒髪をワックスでオールバックに固め、首には髑髏が嵌め込んである十字架のネックレスをかけている。左の頬の十字の傷が特徴的で、ここまでなら少し不良風の少年にしか見えないだろう。だが問題はその服装にあった。

少年が纏っているもの、それは狩衣であつた。立烏帽子や蝙蝠扇を身につけず、動きやすいように邪魔な部分を切り落としていたりするが、間違いなく狩衣を纏っていた。勿論、道行く人々の中でこれが狩衣だと分かる人間は片手の指ほどで足りるだろう。おおかたの人間は『おかしな服装をした不良風の少年』程度にしか認識しないことだろう。

「迎えに来る人遅いな。もう20分も遅れてるぞ」

慣れているのか、少年は周りの好奇の眼を気にすることなく、愚痴を呟きながら自身の周りを漂う小さな黒い粒たちを手で払う。

コールドタール
魍魎だ。「腐の王」アスタロトの眷属。菌類に憑依する悪魔。だ

が悪魔の中では最下級に位置するため、手で払うだけでどこかに飛んでいってしまう。しかし最下級ゆえか、数だけはやたらと多い。漂っているだけならば特に害はないが、見える人間にとっては目障りなことこの上ない。

いくら払っても一向に数の減らない魍魎にいらつときたか、少年は袖に右手を引っ込め一般人に見えないようにして印を結ぶ。そし

て右手で作った刀印を軽く振り、

「――破」

呟く。

瞬間、少年の周りを漂っていた魍魎の動きがピタリと止まり、次いで空気に溶け込むようにして消えていった。

目障りな魍魎が消えたことで満足したのか、ふうと息をつきながら右手の刀印を解いた。

「いやはや、中々見事な腕前ですね」

パチパチと、少年のすぐ後ろから男の声と共に拍手が聞こえた。

バツと振り返る。いつの間にそこにいたのか、少年のすぐ後ろには道化師ヒエロを思わせるような奇妙なスーツとマントを纏い、雨でもないというのに変な柄の傘を持った長身の男が胡散臭い笑みを浮かべながら立っていた。

少年は瞠目する。気付かなかった。

決して気を抜いていたわけではない。むしろいついかなる時であっても、全方向に気を向けていた。特に背後はもっとも警戒すべきところだ。自身の未熟さをよく分かっているつもりだが、まさかこんな変人の接近に気付かなかったとは。

「しかし、陰陽術とは凄いですね。本質は？詠唱騎士アリシア？に近いものでありながらも、いくら最下級の悪魔である魍魎だとしてもその『致死説』を完全に無視し、消滅させる。しかも詠唱の短さ、そして拳動によって術の効果や威力が変化する。例えるなら移動性と攻撃性に特化した？詠唱騎士？と言ったところか。なんと面白いものですねえ」

ぺらぺらとピエロ風の男は、まるで世間話でもするように一人で語っていく。少年は咄嗟に一度解いた刀印を再度袖の中で結ぶ。もし何かをされた時、瞬時に反撃できるようにだ。

「……あんたは誰だ？」

「ん？ ああ、そういえば紹介が遅れましたね。初めまして、蘆屋孔明君。私はこの正十字学園の理事長兼正十字騎士団日本支部支部長、メフィスト・フェレスです」

「……えっ？ あんたが、ここの理事長？」

「はい、さきほど言った通りですよ」

思わず、構えていた刀印を崩してしまうほど脱力した。こんな奇妙天烈そうな人間があの名門正十字学園の理事長と思うと、臨戦態勢を取った自身が馬鹿らしく思えたからだ。だが同時にこの変人理事長の実力は師匠を超えるものだとは孔明は理解した。日本支部の支部長ならば、まだ未熟な自分が気付かなくても至極当然のことだ。ふと、孔明は師匠——今年で90を超えるというのに猿みたいな身体能力を持つ、通称妖怪爺——との昨日のやり取りを思い出す。

『さて、明日からお主は正十字学園で生活することになる』
『はい師匠』

『そこでお主は一人で正十字学園まで行くことになる。学園前に行けば、お主を迎えに来る御方が居られるはずだ。くれぐれも、粗相のないようにするのじゃぞ』

『はい師匠。それで、迎えの人はどんな人なんですか？』
『うむ。これと言って特徴はないが、初めて会うお主でも一目見ればすぐに分かる御方じゃから、そう捜すのに苦労することはないはずじゃ』

「一体どこが、これといった特徴が無いだよ……」

やはりあの師匠は現代人どこか感覚がずれているのだろう。でなければこんな男を『これと言って特徴はない』と言わないはずだ。絶対に。

「さて孔明君。君の話は君の師匠から直にお聞きしています。何でも君は——」

そこでいったんメフィストは言葉を区切り、ニイとさらに笑みを深めながら、こう続けた。

「——あの『青い夜』の被害者だそうで」

『青い夜』

その名を聞いた瞬間、孔明の纏う空気が穏やかなものから鋭利な刃物が如きものに一変する。目もスツと据わり、メフィストを射抜くようにきらめく。

「……だからどうした？ 『青い夜』に俺が関係してたら悪いかな？」「いえいえ、ちょっとした好奇心ですよ。それと同時に、私は君に聞きたいことがあります」

メフィストは手に持った傘の先端を孔明の眼前に突きつける。

「あなたは何のために被^{エクソシスト}魔師になるのですか？」

何かを試すようなメフィストの問い。

それに孔明はすぐさま答えを返した。あの日決めた、叶うかどうか分からないほど大きすぎる決意を告げた。

「俺はサタンを倒し、あの『青い夜』の悲劇を二度と起こさせないために被魔師になるんだ」

メフィストの笑みが驚きに固まり——次の瞬間爆笑した。

「フハハハハハハハハハハ！！　こ、これはまたまたキましたね！

ハハハハハハ！」

「……ちっ！」

ゲラゲラと笑うメフィストにイラつきを覚え、孔明が舌打ちする。誰に言っても、笑われることは頭の中で理解していたが、こっ目の前に思いつきり笑われるのは流石に良い気はしなかった。

「ま、まったく持って正気の沙汰とは思えませんか」

「悪いな。俺はいたって正気だ」

吐き捨てるように言う。

笑われるのがいったいどうした？　どれだけ馬鹿にされようとまかまわなかった。自身で定めた、たった一つの信念と決意をねじ曲げるくらいなら、くだらないプライドなど吐いて捨てる覚悟が孔明の中にはすでにあった。

「クク、『青い夜』の犠牲者が、サタンを倒すために被魔師になる……それがどれほど厳しい道か、お分かりなのですか？」

「ふんっ、どれだけ厳しかろうと、今更俺に失うものなんて何もない。どれだけ厳しくても、俺は必ずやり遂げて見せる。だから――」

壮大な無謀な少年の決意。その一歩が、今ここから、始まる。

「俺は被魔師に、必ずなってやるさ」

プロローグ 少年陰陽師（後書き）

最後のほうがマンガに似てしまったことについてはノーコメントで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8562t/>

青の祓魔師 陰陽師と魔姫と鬼喰らい

2011年9月19日01時19分発行